

おやし兼兄貴

田澤吉郎

代議士初当選以来二十年間、大平先生は私にとって、時にはおやしのごとく、また兄貴のように、いつも傍にいて導いて下さった人でした。大平總理急逝の報に、私は一瞬信することができず、ただ呆然としていました。しばらくしてハッと気がつき、「大黒柱がなくなつた。これは大変なことになつた」と愕然とし、身内を戦慄が走るのを覚えたのです。これは、私一人ではなかつた筈です。同志の方はいうまでもありませんが、多くの国民も大平先生が世を去つて、そこにできた穴の大きさに改めてびっくりし、日本の将来に不安を持たれた結果が、あの同日選挙の成績になつたものと思ひます。大平先生は、自らの死によつて政局の安定という念願を果たされたのだと思つたのです。悲しい運命と申しましようか、いまはただ大平先生のご冥福を祈ることしかできません。

私が池田總理のおすすめをいただいて代議士に当選し、宏池会に入つたのは昭和三十五年でした。同期の方々には、佐々木義武、谷垣専一、金子一平、故浦野幸男の各氏がいました。当時、大平先生は内閣の大番頭である官房長官で、新入りの私たちからみると、雲の上の遠い存在に思われたものでした。さらに、外務大臣や通産大臣、党政調会長、大蔵大臣、党幹事長などをつぎつぎと歴任され、ますます大物になつて行つたのに、あの謙虚であたたかな人柄にひかれて、いつの間にか私たちのおやし兼兄貴のような親しみを覚えるようになっていました。その間に「まず君は政策畑より議運国対畑でがんばつてみるよ」と冗談ともつかずアドバイスされたことは、終生忘れ得ないことです。現に、私の今日は大平先生の予見の通りになつてゐるのですから。

池田総理が亡くなった後、私たち若い代議士たちは、名門宏池会から二人目の総理を出そうということを目指し、前尾先生を立ててがんばりました。残念ながら前尾先生は健康がすぐれず、私たちにしてみれば極く自然に「大平、立つべし」という気持になったわけでした。私たちの若気の至りが、あるいは大平先生を困らせた場面もあったかも知れませんが、最後には大平さんも決断され、一緒にやろうという気になって下さったときの嬉しさは、いまま記憶にあざやかなものがあります。そして、佐藤内閣後の総裁選挙に大平先生も立候補し、予想を超える百一票を得て三位になったとき「よし、これで総裁レースの出場権が確保できた」と思ったものでした。

大平先生の想い出は尽きません。いまでもニヤニヤしながら「まあ、そう急ぐな。一生懸命やれば道は開けるヨ」と、どこかで見えていてくれるような気がする一方、一旦決めたとなると「コラ、しっかりやらんか」と、尻をたたかれそうな気がします。そんな経験は幾度もありましたし、そんな人でした。なかでも、初めての総裁公選予備選挙で大平先生と一緒に演説をしたことが、当選された時の素直に喜んでおられたご様子とダブって、いまでも明るい想い出として思い出されます。総理に就任されてからの大平先生は、不運としかいいようのない苦勞をされました。事、志と違ったことが多かったと思います。寡黙な方でしたから多くはいいませんし、また「これくらいのことはいわんでも判る筈だ」という気もあつたと思います。私は、あの四十日抗争を国対副委員長の立場で目のあたりに見ましたが、あの信念の強さ、忍耐強さには頭の下がる思いでした。同時に、大平先生の気が判らんのか、と切齒扼腕の思いと、自分の力の足らなさに腹が立って仕方がありませんでした。

しかし、大平先生は、中途で倒れたとはいえ、総合安全保障体制、田園都市国家構想、家庭基盤の充実など、将来へ向けての高度な政策理念を残されました。そして、大平哲学、大平理念は、そのままわれわれに引きつがれていることを、大平先生に報告したいと思います。

(衆議院議員・元国土庁長官)